

4-1-2023

A Comparison between Japanese and Arabic apology mentality – Identifying Apology-Related Attitudes Valued by Speakers of Both Languages and Considering Their Factors-

Tariq Hakami

東海大学 - Tokai University 文学研究科日本文学専攻 日本語教育学コース 博士課程,
tariqhakkami@gmail.com

Follow this and additional works at: <https://jfa.cu.edu.eg/journal>



Part of the [Japanese Studies Commons](#)

Recommended Citation

Hakami, Tariq (2023) "A Comparison between Japanese and Arabic apology mentality – Identifying Apology-Related Attitudes Valued by Speakers of Both Languages and Considering Their Factors-," *Journal of the Faculty of Arts (JFA)*: Vol. 83: Iss. 2, Article 27.

DOI: 10.21608/jarts.2022.93869.1192

Available at: <https://jfa.cu.edu.eg/journal/vol83/iss2/27>

This Original Study is brought to you for free and open access by Journal of the Faculty of Arts (JFA). It has been accepted for inclusion in Journal of the Faculty of Arts (JFA) by an authorized editor of Journal of the Faculty of Arts (JFA).

日本語とアラビア語の謝罪意識の対照比較
－ 両母語話者が重んじる謝罪意識の同定とその要因の考察^(*)

Tariq Hussein Hakami

College of Japanese Literature

Japanese Language Teaching Program for PhD

Tokai University

Under the supervision

**El Moamen Abdalla,
Professor Japanese Linguistics & Literature,
School of Global Studies
Graduate School of Letters (Linguistics)**

Abstract

This study clarified differences in mentalities around apologies between native Japanese speakers and native Arabic speakers. It then considered factors that made such apology-related attitudes important to the speakers of each language who were surveyed. We collected and analyzed Google questionnaires administered to 115 native speakers of both languages. The questionnaires investigated the following senses involved in apologies in three contexts that took into account “superior–inferior relationships,” “degree of familiarity,” and “degree of burden.” The senses related to apologies were “apology,” “guilt,” “nuisance,” “explanation,” “compensation,” and “tolerance.”

Results of the survey confirmed that Japanese native speakers tend to place importance on “apology” and “guilt” while Arabic native speakers tend to emphasize “explanation” and “tolerance.” It was inferred that the effect of Islam and Arabic social customs was a factor for native Arabic speakers to “explain” and “tolerate.” It was then concluded that native Japanese speakers inherited the tendency to

^(*) **Bulletin of the Faculty of Arts Volume 83 Issue 4 April 2023**

“apologize” and experience “guilt” from values belonging to samurai culture and that they have been unconsciously applying these values to this day.

Keywords

Japanese apology mentality, Arabic apology mentality, Japanese language education, semantic formulas

المخلص العربي:

مقارنة بين اللغة اليابانية واللغة العربية في الوعي بالاعتذار

- تحديد معنى الاعتذار الذي يقدره كل من الناطقين الأصليين ومراعاة عوامله -

مرحلة الدكتوراه، جامعة طوكاي

طارق حسين حكيم

ركزت هذه الدراسة على الاختلاف في الوعي بالاعتذار بين الناطقين باللغتين اليابانية والعربية. واستهدفت الدراسة العوامل الكامنة وراء ما إذا كان الوعي بالاعتذار مهما لكلتا اللغتين. ولتحقيق هدف هذه الدراسة استهدف الباحث ١١٥ شخص لكل من اللغتين. وقام الباحث باستخدام استبانة Google وجمع البيانات من خلال تحديد ثلاثة مشاهد تتناول "العلاقة الهرمية" و"العلاقة الاجتماعية" و"درجة تحمل العبء" وتحليلها. مواد البحث التي استخدمت للتحقق من الوعي بالاعتذار هي: (الاعتذار)، (التبرير)، (الذنب)، (المضايقه)، (التعويض)، (التسامح).

نتيجة الدراسة، تم التأكد من أن الناطقين باللغة اليابانية يميلون إلى التأكيد على (الاعتذار)، و(الذنب). أما بالنسبة للناطقين باللغة العربية فقد أكدوا على (التبرير)، و(التسامح)، واستنتج الباحث أن العوامل الرئيسية وراء ذلك هي تأثير الدين الاسلامي وعاتادات المجتمع العربي. وأما بالنسبة لسبب تأكيد الناطقين باللغة اليابانية على (الاعتذار)، و (الذنب)، هو أنهم ما زالوا يرثون قيم الساموراي وأنهم يطبقونها دون وعي

1.はじめに

本研究は、アラビア語母語話者（以下アラブ人）と日本語母語話者（以下日本人）を対象とし、両言語話者が謝罪会話に参加した際の謝罪に関する意識（以下謝罪意識）の相違点を明らかにする。そして、明らかになった相違点から日本人がアラブ人に対してアラビア語で謝罪する場合とアラブ人が日本語で日本人に謝罪する場合において問題となりうる事例を推論し、その問題の回避を考察する。

そのため、本研究では以下の2点を目的とし、この問題について考察する。

- 1: ゲーグルアンケートを用いて、各場面で日本人とアラブ人が負担度や上下関係に応じてどのような謝罪意識の項目を最も強く感じるのかを明らかにする。
- 2: 調査によって明らかになった日本人とアラブ人が各場面で最も強く意識した項目とその要因を考察する。

2.先行研究

E. ゴフマン (2002 : 57) は、「『謝罪』を、侵害によって壊された人間関係を取り戻そうとする戦略」と述べており、本研究における謝罪の定義もこれを踏襲する。

謝罪会話の参加者の心理を分析の対象とした研究には、池田 (1993)、大谷 (2004)、鄭・上原 (2005)、ナビル (2007) や NURIAHARISTIANI (2014) がある。本研究では、大谷 (2004 : 32) の「謝罪の背景にある話し手の心理」を謝罪意識と定義づける。

池田 (1993 : 13-21) は「日本語話者の謝罪は低い姿勢でひたすら謝る形をとり、説明や弁明は戦略として好まれず、特に目上の相手に対しては使われぬ」と指摘している。

また、アルモーメン (2010:63) は「アラブ人母語話者の謝罪は説明や弁明という戦略を好み、特に関係の近い人に対して、よく使う。」とアラブ人の謝罪意識について言及している。

謝罪者と被謝罪者の謝罪に関する意識を詳細に分析した研究に、NURIAH ARISTIANI (2014) がある。この研究では、日本語とインドネシア語を対象に、被調査者が謝罪者と被謝罪者の立場になった場合、両言語話者が「謝罪」・「罪意識」・「迷惑」・「説明」・「弁償」という5項目をどのように意識するのかを調査した。その結果、全場面で両言語話者ともに、被謝罪者の立場よりも謝罪者の立場のときに5項目を強く意識する傾向が見られたと述べた。

またインドネシア語母語話者では、自分に対する意識と相手に対する意識の差が日本語のそれと比べて低く、自分が持つ意識と同程度の意識および行動を相手にも求めている可能性がある。場面別における謝罪意識を見ると、謝罪の負担が高くなるほど、自身が意識する謝罪の必要性、罪悪感、相手への迷惑度合い、説明する必要性と弁償の必要性が高くなり、相手にも同程度で同様の意識を期待していることが明らかになった。

そして日本語母語話者に関しては、「説明」の項目と「謝罪」の項目は全場面で同程度に意識されているということが分かったと報告している。この結果は「日本人はあまり「説明」を行わない」という謝罪行動に関する指摘(池田1993、阿部2006など)を支持していない傾向を示す。また、「弁償」の使用意識を見ると、謝罪の事柄が大きい場合の方が小さい場合より使用意識が高く、謝罪の事柄が大きい場合には相手に罪を償う可能性が高いと考えられる。

3. 研究方法

3.1. 調査協力者と調査期間

被調査者の前提条件として、日本語を学習したことのないアラブ人とアラビア語を学習したことのない日本人を対象とする。言語学習歴を指定した理由は、アラブ人からは日本語の、日本人からはアラビア語の謝罪意識の影響を排除するためである。

本研究は筆者の所属するT大学の倫理審査通過後、Googleアンケートを用いて

実施した。アンケートは、アラブ人を対象とするアラビア語版と、日本人を対象とする日本語版を用意した。また、本調査の説明と倫理審査の承認紙、調査に対する協力の内諾書とGoogleアンケートへつながるURLとQRコードの書かれた書類をPDFで用意し、協力者に対して送付した。その後、内諾書にサインとアンケートの回答があった協力者の回答を有効回答とした。

アラブ人の被調査者は、ソーシャルメディアを利用し、インターネット上で調査協力者を募集した。ソーシャルメディアの場合、身分を偽って回答される恐れもあるため、アラブ人の場合のみ学生証の写真も求めた。

アンケート回答期間は2019年8月上旬～9月下旬までと設定し、ソーシャルメディアで協力者を募った。アンケート協力を申し出てくれたアラブ人は計238人であったが、そのうち有効回答は15人で、解答率は57.5% (115/200) であった。

アラブ人被調査者の国籍は、サウジアラビア、エジプト、アラブ首長国連邦、スーダンの大学に所属しており、年齢は18歳～30歳であった。学部1～4年生と大学院生1～2年生の学習者、計115名、学部生は109名 (1年生9名 2年生12名 3年生31名 4年生58名)、大学院生6名で、年齢に関しては18歳～30歳である。

日本人の被調査者は全てT大学に所属する学生である。募集方法は、教員から許可を得たうえでアンケートに関する書類を配り、授業終了後に回答してもらった方法と学内のカフェテリアで筆者が声をかけて集めた方法の2つがある。アンケートは概ね10分～13分程度で終了した。

アンケート回答期間は2019年10月上旬～11月下旬までと設定した。アンケート協力を申し出てくれた日本人は計238人であったが、そのうち有効回答は15人で、解答率は57.5% (115/200) であった。学部1～4年生と大学院生1～2年生の学習者、計115名、学部生は107名 (1年生29名 2年生20名 3年生30名 4年生36名)、大学院生8名である。日本人母語場面はアラビア語を勉強したこ

といふものである。年齢に関しては18歳～26歳である。女性55名、男性は60名である。

3.1.2. 調査における場面設定

Brown&Levinson (1987) は、フェイスが侵害される度合いは「上下関係」、「親疎関係」、「負担度」という3つの要素によって決まると指摘した。そのため、これらの要素と日本とアラブ地域において、学生の日常生活で問題となりやすい事例を考慮し、日本人5名と筆者を含めたアラブ人5名で、場面の負担度を協議した。その結果、以下の3場面を選定した。

場面:

(親しい先輩/友達から、絶版になった本を、一週間で返す約束で貸してもらった。しかし、その本をなくしてしまった場合である。(負担度大)

場面: 親しい(先輩・友達)から、必ず返すことを条件に5千円借りた。しかし、一週間たってもお金を返すことができなかった場合である。(負担度中)

場面: 親しい(先輩友達)とボーリングをする約束をしていた。しかし、当日の待ち合わせ時間から15分間遅刻してしまった場合である。(負担度小)

3.1.3. 調査における謝罪意識

本調査で対象とする謝罪意識は、NURIAHARISTIANI (2014) を踏襲し、「謝罪」・「罪意識」・「迷惑」・「説明」・「賠償」の5つと、新たに追加した「許容」の計6つである。許容」を新たに上げる理由として、アラブ社会では親しい相手の過失を許容する傾向があり、これが当該談話においても適用されるのか否かを明らかにするためである。また、日本社会において「許容」の項目が意識するのか否か、アラブ社会とどの程度の差が存在するのかを対照比較するためである。

- (a) 謝罪すべきだと思うか (以下では「謝罪」と表記)
- (b) 自分は悪いと思うか (以下では「罪悪」と表記)
- (c) 相手に迷惑をかけたかと思うか (以下では「迷惑」と表記)

- (d) 状況を説明すべきだと思うか (以下では「説明」と表記)
- (e) 相手の被害に対して、償いをすべきだと思うか (以下では「弁償」と表記)
- (f) 相手が自分の過失を許容してくれると思うか。 (以下では「許容」と表記)
- 調査協力者には以上の意識調査項目に対して1~4段階の評価をつけてもらうよう指示した (1 =最低値~4 =最高値)。

4. 結果と考察

本研究で分析対象とするアンケートの回答は、1~4段階の評価のうち、最高評価である4 (非常に思う) の回答のみを対象とする。1 (全然思わない) と2 (あまり思わない)、3の (やや思う) を調査の対象としない理由は、被調査者がどの謝罪意識の項目を最も強く意識するのかを明らかにすることが本研究の目的だからである。

4.1. 場面 (負担度大) における日本人とアラブ人被調査者の謝罪意識の相違点

4.1.1 場面-I 親しい先輩を対象とする場合

下記の図1から場面のような負担度が大きい場面で親しい先輩に謝罪するとき、最も強く意識される項目は、日本人の場合、「罪悪」96.5でアラブ人は「説明」83.5であった。また強く意識すると答えた人が少なかった項目は、日本人の場合、「許容」8.7%で、アラブ人は「迷惑」17.4%であった。

「許容」の項目を強く意識すると答えた日本人が一桁台であったのに対して、アラブ人の場合、70.4%が強く意識すると答えていた。また、「許容」のように著しい差が確認された「迷惑」の項目では日本人93%に対して、アラブ人17.4%と非常に大きい差が見られた。

本場面で最も多くのアラブ人に意識された「説明」の項目を強く意識すると答えた日本人は73.9%で、両言語被調査者の間に大きな差は見られなかった。しかし

、日本人が最も強く意識した「罪悪」の項目を強く意識すると答えたアラブ人は36.5%で、約60%の差が見られた。

多くの日本人被調査者が「謝罪」の項目を「罪悪」の次に強く意識すると答えており、94.8%であった。一方、アラブ人の場合、日本人ほどではないが、81.7%が強く意識すると答えていた。

また「弁償」の項目は、両言語被調査者ともに強く意識すると答えたのは60%台で大きな差が見られなかった。

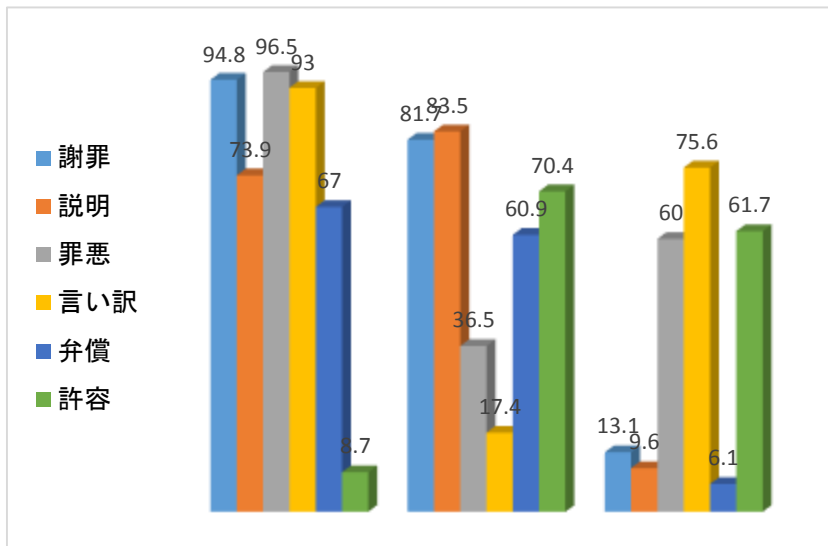


図1 本を借りる場面における謝罪意識の異同(負担度大)

4.1.2. 場面1-Ⅱ 親しい友達を対象とする場合

下記の図2から場面1のような負担度が大きい場面で親しい友達に謝罪するとき、最も強く意識される項目は、日本人は「罪悪」93%で、アラブ人は「説明」80%であった。また最も意識されなかった項目は、日本人の場合、「許容」20.9%で、アラブ人は「迷惑」23.5%であった。

「許容」の項目を強く意識すると答えた日本人が20.9%であったのに対して、アラブ人の場合、76.5%が強く意識すると答えていた。また、「許容」のように著しい差が確認された「迷惑」の項目は、日本人85.2%が強く意識すると答えたのに対して、アラブ人は23.5%と非常に大きい差が見られた。

本場面で最も多くのアラブ人に意識された「説明」の項目を強く意識すると答えた日本人は74.8%で、80%のアラブ人と比べても間に大きな差は見られなかった。しかし、日本人が最も強く意識した「罪悪」の項目を強く意識すると答えたアラブ人は33.9%で、約60%の差が見られた。

日本人の場合、「謝罪」の項目を「罪悪」の次に強く意識しており、91.3%が強く意識すると答える一方、アラブ人は60%が強く意識すると回答した。

また「弁償」の項目を強く意識すると答えた日本人は69.6%で、アラブ人は48.7%であった。

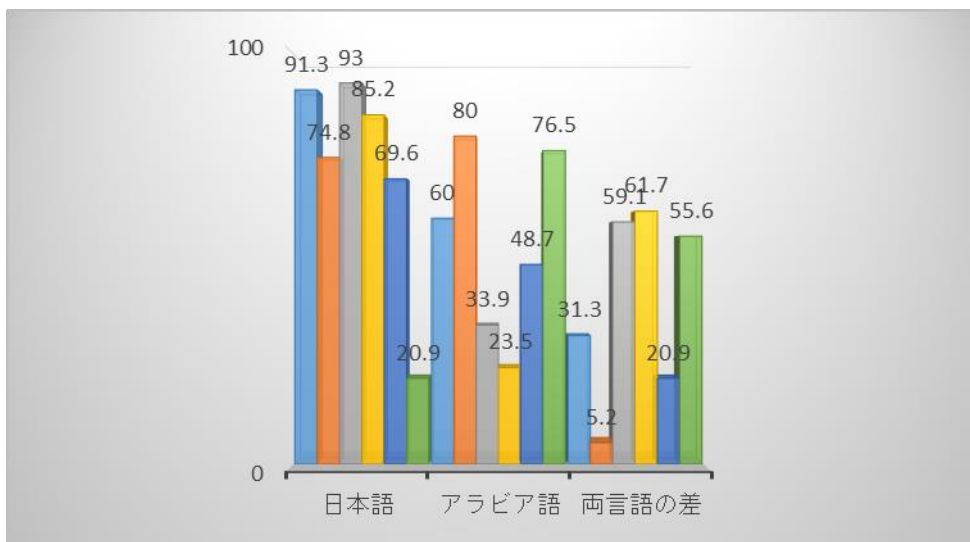


図2 本を借りる場面における謝罪意識の異同(負担度大)

4.2.場面 (負担度中) における日本人とアラブ人被調査者の謝罪意識の相違点

4.2.1. 場面2- I 親しい先輩を対象とする場合

下記の図3から場面2のような場面ほど大きくなく、場面3ほど小さくない場面で親しい先輩で謝罪するとき、最も強く意識される項目は、日本人の場合、「謝罪」の90.4%で、アラブ人は「許容」74.8%であった。また強く意識すると答えた人が最も少なかった項目は、日本人は「許容」24.3%で、アラブ人は「迷惑」9.6%であった。この「迷惑」の項目は、日本人が72.2%であったのに対して、アラブ人は9.6%であることから、日本人とアラブ人との間に約62%の大きな差があると考えることができる。

最も多くのアラブ人79.1%が強く意識すると答えた「許容」の項目を、日本人の14.8%が強く意識すると答えており、その差は約60%と、「迷惑」の項目のように大きな差が確認された。

最も多くの日本人が強く意識すると答えた「謝罪」の項目は90.4%であったが、アラブ人の場合39.1%と、約51%の大きな差がここでもみられた。

「謝罪」の項目の次に日本人85.2%が強く意識すると答えた「罪悪」の項目も、強く意識すると答えたアラブ人は21.7%で約63%の差がみられ、本場面で最も大きい差がみられた。

「許容」の項目の次にアラブ人67.8%が強く意識すると答えた「説明」の項目の場合、強く意識すると答えた日本人は81.7%で約13%の差がみられたが、本場面で最も両言語話者の差が存在しない項目であった。

最後に「弁償」の項目は日本人68.7%であったのに対して、アラブ人は28.7%であり、この項目でも約50%の差がみられた。

全体的に場面2の親しい先輩に対する謝罪意識では、場面1や後述する場面3よりも大きな差が表出していた。

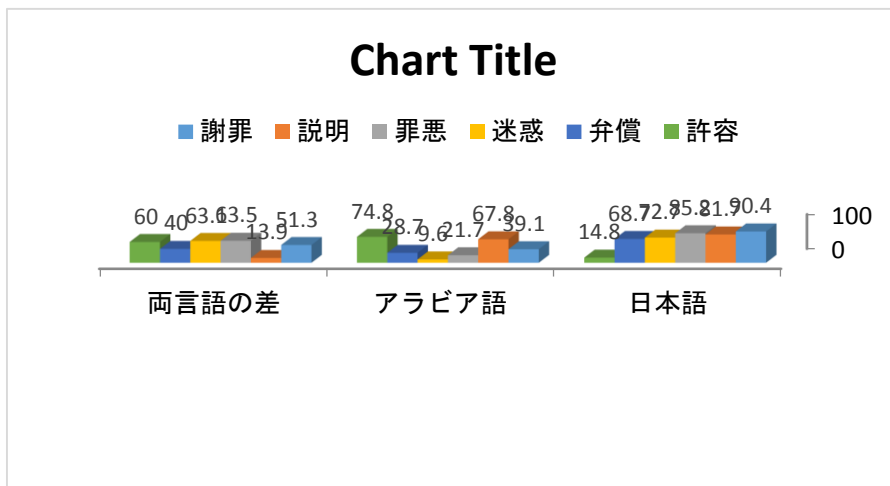


図3 お金を借りる(負担度中)における意識の異同

4.2.2. 場面2-Ⅱ親しい友達を対象とする場合

下記の図4から場面2のような場面ほど大きくなく、場面3ほど小さくない場面で親しい友達に謝罪するとき、最も強く意識される項目は、日本人の場合、「謝罪」の84.3%で、アラブ人は「許容」74.8%であった。また強く意識すると答えた人が最も少なかった項目は、日本人は「許容」27.8%で、アラブ人は「迷惑」13%であった。この「迷惑」の項目は、日本人が75.7%であったのに対して、アラブ人は13%であることから、日本人とアラブ人との間に約62%の差で、当該場面で最も大きな差がであった。

最も多くのアラブ人74.8%が強く意識すると答えた「許容」の項目を、日本人の27.8%が強く意識すると答えており、その差は約47%であった。

最も多くの日本人が強く意識すると答えた「謝罪」の項目は84.3%であったが、アラブ人の場合37.4%と、約46.9%の差がここでもみられた。

「謝罪」の項目の次に日本人80.9%が強く意識すると答えた「罪悪」の項目を、強く意識すると答えたアラブ人は22.6%で約58.3%の差がみられ、本場面で最も大きい差がみられた。

「許容」の項目の次にアラブ人60.9%が強く意識すると答えた「説明」の項目の場合、強く意識すると答えた日本人は78.3%で約17.4%の差がみられたが、本場面で最も両言語話者の差が存在しない項目であった。

最後に「弁償」の項目は日本人58.3%であったのに対して、アラブ人は33%であり、この項目でも約25%の差がみられた。

先述の場面2の親しい先輩同様に、親しい友達に対する謝罪意識では、場面や後述する場面3よりも大きな差が表出していた。

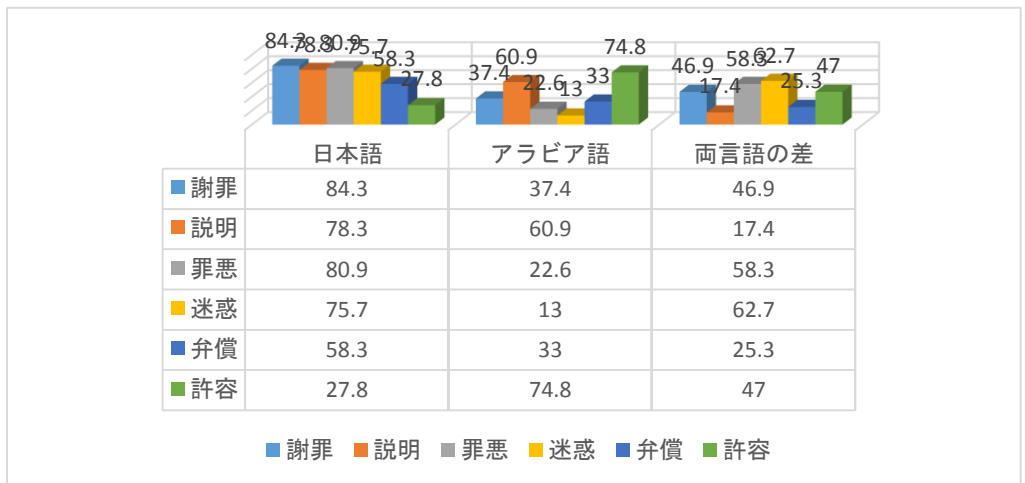


図4 お金を借りる(負担度中)における意識の異同

4.3 場面3 (負担度小) における日本人とアラブ人被調査者の謝罪意識の相違点

4.3.1. 場面3- I 親しい先輩を対象とする場合

下記の図5から場面3のような負担度が小さい場面で親しい先輩に謝罪するとき、最も強く意識される項目は、日本人の場合、「謝罪」と「罪悪」で、両項目ともに53.9%であった。一方アラブ人は「許容」81.7%であった。また強く意識すると答えた人が少なかった項目は、日本人の場合、「弁償」19.1%で、アラブ人は「罪悪」7%であった。特に「罪悪」の項目は、日本人が53.9%であった

のに対して、アラブ人は7%で、約46%の差が存在する。従って、大きな差があるといえよう。

最も多くのアラブ人81.7%が強く意識すると答えた「許容」の項目は、日本人の場合36.5%が強く意識すると答えており、「罪悪」の項目と同じくらいの差が確認された。

強く意識すると答えた日本人が最も少なかった「弁償」の項目は、アラブ人も同様で少なくとも13%で、大きな差が見られなかった。また「罪悪」の項目と同様こ、最も多くの日本人53.9%が強く意識すると答えた「謝罪」の項目を強く意識すると答えたアラブ人は23.5%で、半数以下であった。

また「迷惑」の項目を強く意識すると答えた日本人は40.9%であったのに対して、アラブ人は8.7%と約32%の差が見られた。

そして「説明」の項目を強く意識すると答えた日本人は53%で、アラブ人は1.3%であったことから差がほとんど見られなかった。

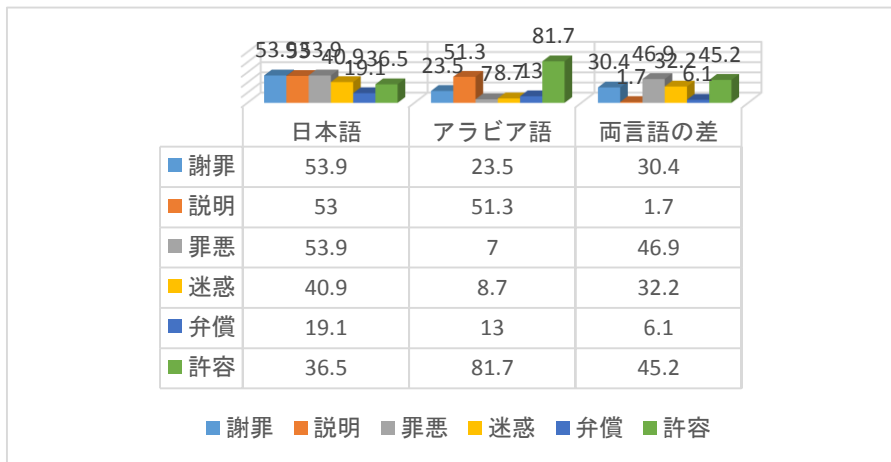


図5 時間に對する(負担度小)における意識の異同

4. 3. 2. 場面3-Ⅱ親しい先輩を対象とする場合

下記の図6から場面Bのような負担度が小さい場面で親しい友達に謝罪するとき、最も強く意識される項目は、日本人の場合、「謝罪」と「罪悪」で、両項目ともに58.3%であった。一方アラブ人は「許容」79.1%であった。また強く意識すると答えた人が少なかった項目は、日本人の場合、「弁償」24.3%で、アラブ人は「罪悪」8.7%であった。特に「罪悪」の項目は、日本人が58.3%であったのに対して、アラブ人は8.7%であることから、約50%の大きな差があるといえよう。

最も多くのアラブ人79.1%が強く意識すると答えた「許容」の項目は、日本人の場合57.4%が強く意識すると答えており、約22%の差が確認された。

強く意識すると答えた日本人が最も少なかった「弁償」の項目は、アラブ人も同様に少なく13%で、大きな差が見られなかった。また「罪悪」の項目と同様に、最も多くの日本人53.9%が強く意識すると答えた「謝罪」の項目は、アラブ人22.6%が強く意識すると答えた。

また「迷惑」の項目を強く意識すると答えた日本人は34.8%であったのに対して、アラブ人は11.3%と約23%の差が見られた。

そして「説明」の項目を強く意識すると答えた日本人は53.9%で、アラブ人は42.6%と、約11%の差が見られた。

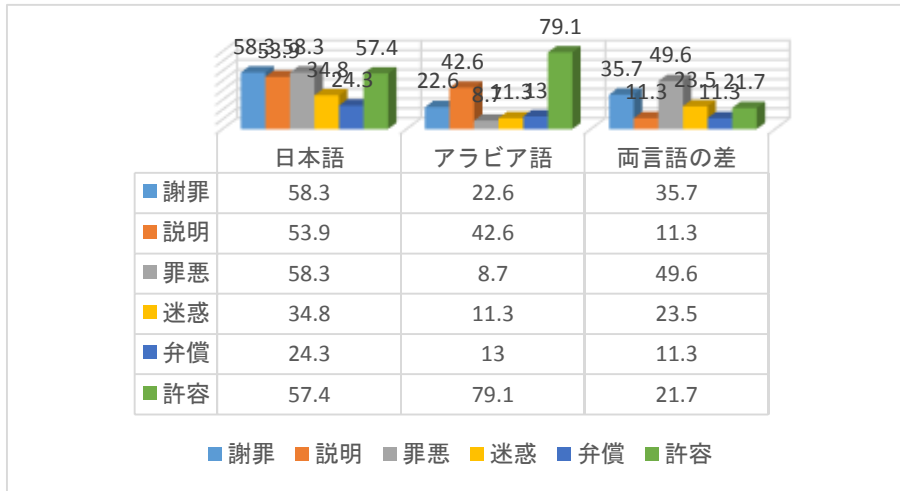


図6 時間に遅れる(負担度小)における意識の異同

5. 考察

5.1. 各場面で最も意識された・されなかった謝罪意識の対照比較

場面I-

Iで最も意識された項目は、日本人の場合は「罪悪」、アラブ人の場合は「説明」であった。

場面II-

IIで最も強く意識された項目は、日本人の場合は「罪悪」、アラブ人は「説明」であった。

場面III-

Iで最も強く意識された項目は、日本人は「謝罪」、アラブ人は「許容」であった。

場面IV-

IIで最も強く意識された項目は、日本人は「謝罪」、アラブ人は「許容」であった。

場面B-

Iで最も強く意識された項目は、日本人は「謝罪」と「罪悪」、アラブ人の場合は「許容」であった。

場面B-

IIで最も強く意識された項目は、日本人は「謝罪」・「罪悪」、アラブ人は「許容」であった。以上の結果をまとめると、次の表1のようになる。

表1 各場面で最も意識された謝罪意識

場面	被調査者	親しい先輩	親しい友達
場面1	日本人	「罪悪」	「罪悪」
	アラブ人	「説明」	「説明」
場面2	日本人	「謝罪」	「謝罪」
	アラブ人	「許容」	「許容」
場面3	日本人	「謝罪」と「罪悪」	「謝罪」と「罪悪」
	アラブ人	「許容」	「許容」

日本人の場面1と3で最も強く意識された「罪悪」の項目は、場面2においても、「謝罪」の次ぎに強く意識された項目であった。また場面2と3で最も強く意識された「謝罪」の項目も、場面1で「罪悪」の次に意識された項目であった。

アラブ人の場面1で強く意識された「説明」の項目は、場面2と3で「許容」の次に意識された項目であり、場面2と3で強く意識された「許容」の項目も場面1では「説明」の項目の次に強く意識された項目であった。

そのため、以下では日本人の場合は「謝罪」と「罪悪」の項目を、アラブ人の場合「許容」と「説明」の項目をなぜ強く意識するのか、その要因を考察する。

4.2. 両言語話者にとって最も意識された謝罪意識の要因

まず初めにアラブ人が「説明」と「許容」の項目を重要視するのか、またその要因を以下に考察する。

アラブ人が負担度に関係なく「許容」を強く意識する理由として、**الاخلاق الإسلامية**

الحميدة (イスラム教の道徳) が関連しているのではないかと考える。イスラム教では、相手の過ちを許容することは善行とされている。コーランには「許容」に関する文章が非常に多く存在している。ここでは以下のスーラ/Surah (章) の an-Nur というアーヤ/Ayah (文の番号) 22を取り上げる。

قال الله تعالى: (وَلْيَعْفُوا وَلْيَصْفَحُوا أَلَا نُحِبُّونَ أَنْ يَغْفِرَ اللَّهُ لَكُمْ وَاللَّهُ غَفُورٌ رَحِيمٌ).

この文章を和訳すると、「あなたがたの中、恩恵を与えられ富裕で能力ある者には、その近親や、貧者とアッラーの道のため移住した者たちのために喜捨しないと、誓わせてはならない。かれらを許し大目に見てやるがよい。アッラーがあなたがたを赦されることを望まないのか。本当にアッラーは寛容にして慈悲深くあられる。(三田1972)」¹となる。

このような表現がコーランには数多く存在するので、ムスリムにとって「許容」という意識は非常に重要な道徳の一つであると言える。本研究で対象としたアラブ人被調査者の国籍は敬虔なムスリムが多い国であった。そのため本研究のアラブ人被調査者はこの道徳を強く意識し、許容を選択したのではないかと推論する。

本研究のアラブ人が「説明」の項目を強く意識した要因として、アラブ社会で説明という行為が好まれているからだと推論する。アルモーメン (2010:63) も「アラブ人母語話者の謝罪は説明や弁明というストラテジ

¹ 「イスラムのホームページ」 <http://www2.dokidoki.ne.jp/islam/quran/quran024-2.htm> (2022年9月7日閲覧)

一を好む、特に関係の近い人に対して、よく使う。」と述べており、アラブ社会では「謝罪」には説明が不可欠だと考えられている。そのため、「説明」の項目を強く意識したのではないかと考察する。

次に日本人が「謝罪」と「罪悪」の項目が強く意識された要因について考察する。

日本人が「謝罪」の項目を強く意識する理由として、日本の社会で謝罪という行為が非常に重視されているからだと考える。日本の慣用語の一つとして、「死んで詫げる」という言葉があるように、実際に重大な過失の責任を負わされた場合、この言葉を体現する事例が今も見られる。

なぜこのような事例が生じるのかを考察すると、日本人は自身の過失に対して、罪悪感を強く意識するからだと考える。鄭 (2006:51) は「日本人は、「過失」をすると、他者の面目侵害をしたと台湾人よりもより感じて、謝罪すべきと感じる傾向がある」と報告している。

また鄭 (2006:50-

51) は「謝罪」は自他の面目の修復義礼である(Goffman, 1967)」という考えに基づき、「日本人は自分に責任のあるような

「過失」に直面するとき罪悪感を高く感じる」と報告もしている。本研究で対象とした場面はいずれも親しい相手に対して何らかの過失を与えた場面である。そのため、罪悪という謝罪意識が強く意識され、それに伴い、謝罪も強く意識されたのだと考察する。

Goffman (1967) の「謝罪」は自他の面目の修復義礼であるという理論に基づいて謝罪の意味を考えると、「謝罪」を非常に強く意識する日本人は面目を大事にすると捉えることができる。この捉え方は、加地 (1997) の「日本人は「名(形)」を優先する傾向がある」という指摘や、

末田 (1998) の、日本人の面目に対するとらえ方として「自分の社会的立場が社会から受け入れられるか否か」と報告とも近い。

なぜ日本人が面目を重要視するのか、その背景を歴史的観点から考察すると日本人が面目を非常に重視した武士の価値観を引き継いでいるからではないか。武士は面目のためならば己の命を懸ける存在であった。例えば、山本常友の『葉隠』を現代語訳した神子(2003:140-143)では以下のような当時の武士の面目に対する捉え方を象徴するような事例が書き留められている。

「ある一行が飲酒によるいざこざで殺人事件を起こした。事件以前に帰宅していたが木塚の家来が、事件のことを知り、当事者たちのもとに向かいわざわざ自身もその場へ来た供述するように願った。その理由として、「主人である木塚は先に帰った主張を信じないだろう。そして

その主張が認められても卑怯者扱いされて、汚名を着たまま主人に殺される。それゆえにも無念である。同じ死ならば、人を切った罪で死にたい。もし承知しないならば、この場で腹を切る」といって、一向に承知させたが、取り調べで一行経緯をすべて白状した。そして殿様をはじめとする評定の面々は感心し、彼を褒めた。」

本論では面目の損傷による事件を『葉隠』の事例からのみ取り出したが、面目を守るため武士が自身の身命を賭した事件は、武士が支配階級であった時に度々起きている。

さらに16世紀に來日した宣教師たちの書簡を翻訳した河野(1994)には、面目のために命を懸ける存在である武士を、同年代の人々は尊敬していたと次のように記されている。「武士以外の人たちは武士を大変尊敬し(河野,1994:97)。」

また、武家という社会階級が公的に廃止された後も、新渡戸稲造が著した『武士道』が日本でも広まり、現代に至るまで受け入れられている。そして、現代においても新渡戸稲造の『武士道』や山本友常の『葉隠』、大道寺友山の『武道初心集』などがたびたび講演や論評で引用される例を目にする。

本論では新渡戸稲造の『武士道』が与えた影響や『武士道』で論じられた価値観と実際の武士の価値観の違いなどについて述べたが、このような歴史の事例から、日本人が古くから今に至るまで武士の価値観を尊敬の念を抱いていたと推論する。そのため、日本社会において、武士にとって非常に重要な価値観である面目という概念が今なお無意識的に重要視されているのではないか。その結果、自身の過失によって面目に傷がつくのを恐れ、その修復のために謝罪という方法が日本社会や日本人にとって好まれるのではないかと考察する。

5. まとめ

本研究は日本人とアラブ人が負担度の異なる3つの場面で、力関係が異なる親しい先輩と親しい友達に謝罪する場合、どのような事柄を意識するのか、その相違点を対照比較することを目的とした。データ収集の方法としては、Googleアンケートで行い、日本人・アラブ人ともに115名に調査の協力を仰いだ。対象とした謝罪意識は、「謝罪」「説明」「罪悪」「迷惑」「弁償」「許容」の6つで、負担度の異なる場面でそれぞれの項目を最低値～最高値4の間で評価するように指示し、最高値である4のみの数値を分析の対象

² 鍵屋の辻の決闘や赤穂事件、宝暦治水事件など

とした。分析の結果、場面-

Iで最も意識された項目は、日本人の場合は「罪悪」、アラブ人の場合は「説明」であった。場面-

IIで最も強く意識された項目は、日本人の場合は「罪悪」、アラブ人は「説明」であった。場面2-

Iで最も強く意識された項目は、日本人は「謝罪」、アラブ人は「許容」であった。場面2-

IIで最も強く意識された項目は、日本人は「謝罪」、アラブ人は「許容」であった。場面3-

Iで最も強く意識された項目は、日本人は「謝罪」と「罪悪」、アラブ人の場合は「許容」であった。場面3-

IIで最も強く意識された項目は、日本人は「謝罪」・「罪悪」、アラブ人は「許容」であった。

以上の結果から、日本人が強く意識すると答えた項目は、いずれも上下関係にかかわらず、場面1では「罪悪」、場面2と3では「謝罪」で、アラブ人の場合も上下関係にかかわらず、場面1では「説明」、場面2と3では「許容」あったことが明らかになった。

そしてアラブ人が「説明」と「許容」の項目を強く意識する要因として、アラブ社会とイスラム教で重要視されているという要因が影響していると推論した。また、日本人が「謝罪」と「罪悪」を強く意識する要因として、武士の面目を大事にするという価値観が日本社会に内在しており、その価値観を多くの日本人が無意識に大事にしているからだと考察した。

引用文献

- 阿部加奈子(2006)『謝罪の日中対照研究』広島大学大学院教育学研究科言語文化教育学専攻日本語教育学専修 修士論文
- アルモーメン・アブドーラ (2010) 『地区が読めないアラビア語母語話者、道を聞けない日本語母語話者』小学館
- 池田理恵子(1993)『謝罪の対照研究—日米対照研究—Faceという視点からの考察—』『日本語学』第12巻1号,pp.13-21.
- 玉原(2009)「日中における謝罪言語行動の対照研究」『東アジア日本語教育・日本文化研究』12, pp.223-236.
- 加地申行 (1997) 『現代中国学』中公新書
- 神子侃(2003)『新編樂園』たちばな出版
- 河野純徳 (1994) 『聖フランシスコ・ザビエル全書第3 (全4巻)』東洋文庫
- 末田清子 (1998) 中国人学生と日本人学生の「面子」の概念とコミュニケーションストラテジーに関する比較の一事例研究『社会心理学研究』13,103-111.
- 藤森弘子(1996)『関係修復の観点からみた『断り』の意味内容—日本語母語話者と中国人日本語学習者の比較—』『大阪大学言語文化学』5号, 5-17.
- 三田了一 (1972) 『聖クルアーン: 日亜大役・注解』(abu版) 日訳クラーン平利行会
<http://www2.dokidoki.ne.jp/islam/quran/quran000.htm> (最終閲覧日2021.8.28)
- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987) *Politeness : Some Universals in Language Usage*.
Cambridge: Cambridge University Press.
- Goffman, Erving. (2002) 『儀礼としての相互行為』浅野敏夫訳,法政大学社版局 (原書1967).
- NURIAHARISTIANI (2014) 「日本語とインドネシア語の謝罪行動の対照研究」広島大学大学院教育学研究科文化教育開発専攻博士論文 (日本語教育学分野) .